



火之用心

黃山老不所

全



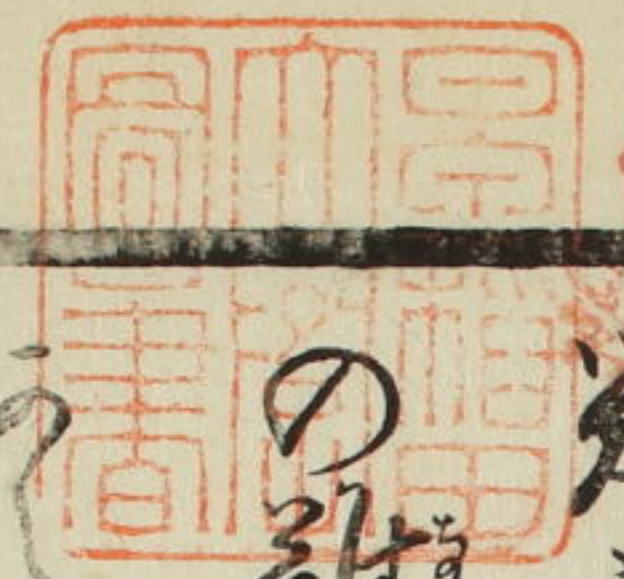
三河屋平齋

1353



仁
1343
巻

梯^{あめつら}を^{あめつら}地^{かえ}陰^{かえ}湯^{かえ}吹^{かえ}風^{かえ}一^{かえ}時^{かえ}多^{かえ}の^{かえ}八^{かえ}
ど^{かえ}く^{かえ}い^{かえ}つ^{かえ}ど^{かえ}も^{かえ}運^{かえ}気^{かえ}滞^{かえ}り^{かえ}く^{かえ}ハ^{かえ}風^{かえ}及^{かえ}雷^{かえ}震^{かえ}
乃^{かえ}震^{かえ}阿^{かえ}り^{かえ}人^{かえ}死^{かえ}身^{かえ}の^{かえ}く^{かえ}小^{かえ}津^{かえ}を^{かえ}そ^{かえ}も^{かえ}極^{かえ}く^{かえ}甚^{かえ}
災^{かえ}害^{かえ}あ^{かえ}り^{かえ}け^{かえ}き^{かえ}や^{かえ}と^{かえ}起^{かえ}く^{かえ}切^{かえ}ち^{かえ}水^{かえ}火^{かえ}
の^{かえ}難^{かえ}あ^{かえ}り^{かえ}と^{かえ}く^{かえ}小^{かえ}也^{かえ}甚^{かえ}ま^{かえ}ま^{かえ}ん^{かえ}ハ^{かえ}有^{かえ}ぐ
く^{かえ}災^{かえ}小^{かえ}を^{かえ}く^{かえ}陸^{かえ}け^{かえ}き^{かえ}つ^{かえ}ご^{かえ}ら^{かえ}り^{かえ}乃^{かえ}
曉^{かえ}よ^{かえ}加^{かえ}茂^{かえ}川^{かえ}の^{かえ}東^{かえ}なる^{かえ}文^{かえ}川^{かえ}町^{かえ}と^{かえ}つ^{かえ}子^{かえ}所^{かえ}
よ^{かえ}中^{かえ}火^{かえ}起^{かえ}り^{かえ}て^{かえ}た^{かえ}ら^{かえ}よ^{かえ}救^{かえ}十^{かえ}軒^{かえ}井^{かえ}



神田後藤町三見番地
三河屋三郎

神田後藤町三見番地
三河屋三郎

戊午
手

くまがさやうの東風もさうして、東極海
もこの榮養寺小四町余り、城隔る火飛
移り、阿らり四町一時もえ多らして、阿
らり小焼もろがり、佛光寺、周幡寺、阿らり河の
奉國も壬生の地、滅堂まで焼ぬけて、神泉
苑の池ももろさぬ、火と焼たがり、上京まで
ハも平比ぶらり、津福寺通りを、水一七野社
今宮、沙羅所も程多くを焼す、東北ハ鞍

るに、加茂川堤と限り、南東よりして、大佛のこな
も、ら、筋、早、宮、町、立、條、の、橋、に、中、絶、ぬ、下
寺、町、此、も、ろ、り、東、御、堂、も、焼、た、り、て、志、も、の
珠、教、や、ま、ら、と、限、り、西、奉、鎮、寺、御、門、ま、ろ、く
ろ、て、火、止、ま、ら、な、堂、徳、殿、急、な、ら、津、京、ま、て、ハ
六角堂と、ろ、り、め、寺、町、の、折、多、ね、其、作、の、寺
院、急、く、北、へ、く、中、焼、も、ろ、り、下、御、靈、草、寺、も
煙、の、ろ、り、小、焼、も、ろ、り、二、条、樵、木、町、の、邊

長...

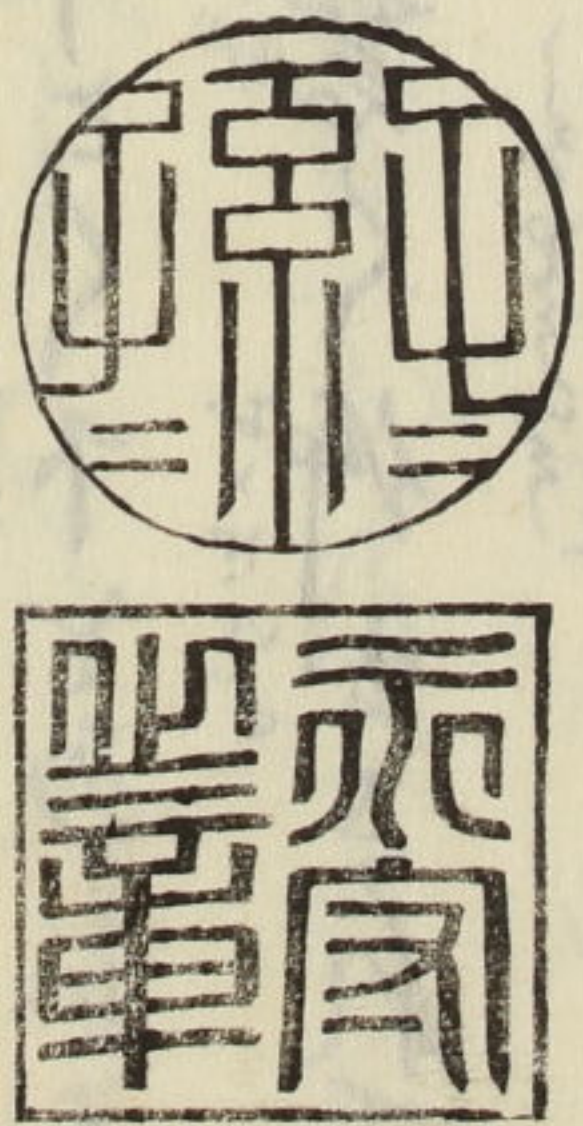
二

とを川東へ火籠灰と頂女精舎とを分
 けたり又町屋方焼失て翼也月朔日の夕
 子火籠りぬ凡東西式拾六町南北四拾町余り
 神社三拾七ヶ所佛圖式百を院町教千五百廿所
 余戸教六万五千三百拾軒昂死の人々うすを
 去るごとくや海よ未曾有の大火もといと
 うあり一紀元の活も漸く二日一夜乃うらよ
 焼跡く京と成よるも心一しく志のハ

河邊と御仁政の沙代かしく下とありて
 患難を救済ふ沙ふとぞも勢多く仰出されて
 ぞ一毛の大愛もさほど諸品流通よく一
 日く小家作おびきしく四方一適さし
 人くもも中津都よ立の海かくのめさ
 大愛ある折くハ美事一振振さし宛て
 取ものもとり河くど後悔おきささばん得
 ちも成しきりやとむとつ三川書河侍先

小冊と成り救済賤倉庫と號号
傳ること志す

愛宕山人序



救済賤倉庫

長氏卿約くわん患難相恤七事一曰水火二曰
盜賊三曰疾病四曰死喪五曰孤弱六曰誣枉
七曰貧乏と河邊くわんも中くわん小くわん洪水里くわんも河
邊くわん火家を焼くわん誰くわんあるくわんて跡くわんよくわんなくわんすくわんはくわんの
非くわんをくわんとくわんりくわんどもくわん毒くわんくくわんまくわん心くわん得くわんちくわんまくわんまくわんとくわん死くわんよ
とりて感くわんふくわんものくわんありくわんまくわんまくわんあくわんはくわんものくわん事くわんく
心くわんとくわん利くわんひくわん百くわんはくわんひくわんの下くわん於くわんハくわん控くわんさくわんらくわん在くわん内くわん乃
婦くわん女くわんあくわんどくわんもくわん火くわん災くわんのくわん大くわん事くわん成くわん毎くわんくくわん念くわんを

入中受をく——我亦ハ勿論の事——子隣はい
焼阿婆ハ半をせとの怨らん人ハ患難とけ
こくに國を起と發か——ま甚費いくむくと
いふ中限ま多く或ハ人命ハかとも也
能くおぢれ怯む——

火事——といふも子前のものもやと集り
怯む——消方の事ハ世よそりて様く
見もくくひある——さう事ハはら——か
——小火のうらら不衆人ハ世と阿婆ハ水など

とこび消とまきハ甚き安——火もびこりてハ
たやすく防ぎが——いぬ河もきり也
風も——き時の火災多と町敷いの程
海も——とも沖のすくかろむ風下ハ勿論
の事——ちりちり——大火小及びちむ風下小
河もむとも用をす——風ハ東風ハ阿婆
ども或ハ南よなり時極西ハ西——過り吹か
まことあるちり月ハよまきハな——必沖の
阿婆ハか

ぬるに赤月の老人小貝婦人或ハ病人
阿一^あまよとひの^んを^んた^んめく先と志め
合せそ^ん遠もま^んこ^ん危^んく^んな^んも^ん何^んも^ん子
る^んを^んよ^んく^んい^んぬ^んめ^ん性^ん成^んの^んと^ん付^ん持^んく^んお^んく
迹^ん出^んま^んべ^ん一^ん必^んく^んい^んひ^ん合^んせ^んを^んた^んし^んく^んう^んず
ま^ん一^んま^んう^んハ^んる^んふ^ん便^んり^んち^んく^んを^んと^んく^んう^んず
ま^ん一^んま^んう^んハ^んる^んふ^ん際^んに^んま^ん焼^ん何^んと^ん立^ん成^んり
去^ん義^ん何^ん角^んと^ん見^ん何^んと^んま^んむ^んる^んか^んそ^んな^んえ^んり
大^ん事^ん換^ん多^ん一^ん右^んの^んを^ん付^んま^んる^んを^んま^んさ^んで

或ハ子と一^ん多^んい^ん母^んと^んる^ん縁^んく^ん乃^んう^んま^んし
お^んく^んを^んは^んく^んし^んく^ん立^ん成^んる^んあ^んと^んと^んま^んま^んま^んて
手^んを^んく^んれ^んお^んく^ん何^んと^ん一^ん

火災と阿一^んハ^ん才^ん一^んを^ん切^んる^ん何^ん書^んら^んの^ん帳^ん金^ん銀
神^ん佛^ん木^んを^ん持^ん出^んま^んべ^ん一^ん金^ん銀^ん後^んハ^ん去^ん義^んを^んえ
ま^ん一^ん害^ん一^ん納^んむ^んま^んハ^ん志^んう^ん何^んべ^ん一^ん若^ん火^ん火^んの^ん命
な^んま^んハ^ん迹^んら^んに^ん金^ん銀^ん後^ん木^ん縁^んく^んお^ん願^んま^ん持
出^んべ^ん一^んむ^ん丸^ん葉^ん氣^ん何^ん等^んと^ん懐^ん中^ん一^ん握^んを
飯^ん之^んツ^ん程^ん充^ん用^ん志^んま^んべ^ん一^ん

進方風下とよけ方角とかんぐくらの
心ろまのくくお申さすはちと考へ
進へ大火の時ハおく揚焼のなりゆき
何より前後の及成失ひ火は包まきて死
まはらぬの多しとよく心得べし

徳道を土籠へ納むに壁をよとよく
むはどのまよと除く處へ窓ハ内外よく志
め目めりよとて窓のうらふ小物らんと
よく水はせしめて釘よとちつけせしむべし

扱を籠へよく徳道をと納め口二三尺の
たしおよ水を入るより入口もぬき物ら
とかくせはる紙くよと裏白と戸は
親言のよと志め目めりよとよとすべし
籠中骨が孫とよくぬるべし
土籠へ油紙紙紙紙傘炭茶多とこ
あれ木の多しひ入る事といむべし
河をが
の下め方へ入るべし

土籠よ流出をよと有る事よとよく

是より火のゆより一車以後の火はふ
 いくむとつふ事か一添土花ハ出も為
 く湖裏白むよりあて危きもの也そまの火
 掃りて幸土花へ火のまりの事切くあり
 んゆ魚一土花のまをかばく石を用ふと
 あしく多きと出よて海んぢろ形は作る状
 多きもの外窓の金戸河一さものあり
 目ぬりあくざ海也む板かさ一水切窓
 ぶけ一ホ石除くべ一そ非土花河を

ちうと建とのた山一火けよく成並一
 害の納め六道をよく納め上二尺のまり
 明あき好ことよくい多一砂と二尺半あき
 水をよく水よ切一かひそよ盤よ
 水を入かく屋一
 井戸家内よ救河くぐ土花ちう記所の井
 戸と除け重き余の井戸一土花道をと金
 上二尺半水垂て好ことい多一そ上へ土を
 をくまりせ一土河り金さる時ハ砂をばらと

相まゝの地をゆゑく廻く道々をへ入泉水同
松の仕迫くふいふ一息一



去我ち紀人道々を持出まゝも大火の良
川原相或ハ場亦廣さかへ持出しては
廻く流方より持出まゝも一西はは
ありま道々をふ火飛揚り焼くものあり
たとく町くまゝよるま田ん町を廣さか
とも岫のまかへず火塗よく道々をみ
何まざる方とあへて持出一人と身をおく

べー折角持出ー焼まはるものありー炭
大火の良か茂川筋或ハ赤本の野道ま
細中或ハ寺く基所ホ一持出ーを悉く
焼失せし也考何まざるま事一

庭石のたぐひへ去とけかひ或ハまゝ
よを水よまゝ一まへー石焼筆ハ五
是ホも云ふ埋まかへー洗鉢同様の
仕迫方より石の類ハ火小河ハ捧るなり
戸障子襖の款味響のまホ去花宮々の用

入る一火後甚う由あり

右の如く家角より瓦納め去る瓦害何角を

能く及最良尺も男をくまり進も途

せぬは極りもけ出る時よ持づるふくも八

鳥に手揃長持湊細川破長持の指三本

本履ホを拵出す一第一番は入用の品也

必は用具をよする一かきず

新橋小河ひまゝ六持出せし用具をやり

らしてせも少く焼所とく立ちど中焼まを

かきのけ去る花へららと波も去る花の通り

の焼本をよくとり除け去る花の極子考

又も一

使もて舟戸の車物一繩ともとりあけ

長持の指之本のかしらを細むさまで

得と申ひ車を繕舟水次らみ去る花并小

害の道をよく志めして去る花穴ぐらあを

せしきえん改むべし今年大火の言去る花

罷く事おそくするを余方の換失多介

十一

いの際大火あても焼後二時よ及べハ火氣ハ
 消らり道すしを考へ果く立ちどまべし
 万一去菘へ火入あると見申せば火のまじり
 雨を考ふべし多くハ窓或ハむらし令物
 或ハ嵐河を裁ハかばくも或ハ流去菘ホよ
 火入あるし二階より焼ると見申ば煙の出
 るかこの至福くもごとくけ尾をもち縁
 のけ裏板をお破りて裁きよ水を水を入
 べし大神火消しと云り戸を閉き水を

はこもを消べししし叶ぬ時あても
 随分お賤をた出し物くべし去菘ハ
 多中よりあるものも何れも必ず必後
 へかゝす志のしよく見据ひく怪我を
 こそやうふをほしし何事もおそく度り
 ていせんうさかし此を身一よ公の老人
 小見婦人と何事へ成とも能く重て主人
 石津の連者も何事のそ百つさし
 床を去菘よりびふ穴を改むべし

此一少よかこうに里出花焼換阿りそハい程
 悔えとも詮を——このゆよ何程大火も
 遠方へ逃びかろぞ見斗ひ有つさ事や
 近火といもまきあう人おく火のえをえ
 中ぐけ火車羽織着用す——たかくてハ
 志よ語——かす油——て大火の音あると
 火車—装束着せざるいんづる——きこものあり
 平日手ちうきりよは並——

常つねくたつと躰おんへおん置法品の事

火車お茶束

皮火車羽織

陳笠

大鷹おとびに

馬うま焼灯やちん

長なが撥おし

蠟ろう燭そく

大團おほ

細こ引ひき

水みづ箆うご 差さ紐ひもをを行ゆ組ぐ細こ糸いとをを

釣つりへへ繩なわ

ろろんんずず

右の外みぎの公こうががけけ用よう意いををささべべ

持出べき諸品の事

諸徳文

帳類

金銀

丸薬 氣付

印判類

左切或書物類

鷹口

手桶

長楯

破

細

楸

長持の持立 木履

水籠

大火の際ハ米味噌等口みり分持出すべし

右の如く群へ至兆帯を守らべし

此小冊家毎よまじり多し人ものハ

常々急ぎあかき家内此者へ讀聞

せし用公一必油断急ぐべし

水火あて人命を助るべし

尊敬すべきもの也

火を止むるも急ぎあかき物に消し有る

し紀事や平生火を大切よ志多る人

其真加よと里火災乃時分家財燬殘

是蒙昧より天壽を損のつとある如き

明日是不可慮念

明日の志これ大に成と成るざるハ賢愚の
よき悪縁の如き物あり然るに成ることを
おぼしめざる我強くおぼしめんと
けりる無益と思ふを勞し心中少時も
安んずる法不決斷して日々に情事(こころごと)を
志しおぼる人あり是れ蒙昧より天壽を損
るべしつりたるまはつるを明くせむこれ

百病を生るは周とあるなり氣を明くむる大
要ハ他あり 唯決断ありあり

飲与食不可過度

飲食の二つを其味を貴しし其味を樂む
為ありあはれ時其味を以てつらさを喜ぶは
飲と食と其のちのちこれバ饑飽よりいふ
氣力に強弱を見えたるも其著しき正按
あり如何とありバ飲食は度中に入て自然
其力を以て是れ消化し其度宜しき

時を清濁の血液を生じ能く刃を毒とし
種々乃妙用を便して毒物に棄り新物に
毒をよそし人々自然に毒をよそし
毒をよそし人々自然に毒をよそし
餘る所の物ぎんく小穢物と称す終に病を
生ずる所を調と名する古人毛守は如瓶と箴と
故に餘食は度子應ずるをよそしと云
其度子有餘
不足ありと云

貴くつても水一不足あると
益あり有餘あるは害あり

非正物不可苛食

食を五味の調和を貴きとつども食に對して
果數多く食へ食を腐るは極中にして生果
果ありといふも胃中以下毒をよそし
一と好むを消化して不潔の血液を生じ
不潔の血にして何の色も多くと腐るは極中
殊に饅餅やる物魚鳥乃肉不鮮の物最食ふ
腐るは極中にして不潔の血液と称す
病を生ずる所を調と名する
新解しと云
おく食をよそしと云

無事時不可服藥

藥物は効力ある物ゆゑ法をたがふ時は却て害
あるのありされば古より毒ものなり故に
今時乃人思ふ事^しに^ん法^をた^がふ^に能^き
事と^もあ^らん^んを^し法^をた^がふ^に能^き
其^の甚^しき^に保^ちり^醫を^し法^をた^がふ^に能^き
之^もあ^らん^ん大^に振^りの^病の^甚き^に保^ちり^醫を^し
自然乃力によりて病を平癒するものあり
過^る節^の人^を大^に方^に此^の病^をは^らふ^に能^き

妹^は復^た其^の法^をも^の多^し一^は解^は飲^酒を^好む^る
人^を教^へ湯^頭痛^し心^中を^懨懨^と放^す自^ら
吐^きん^んを^せ能^く自^ら吐^きん^んを^せ能^く
其^の力^を是^に用^ひて^は自^ら吐^きん^んを^せ能^く
是^の如^く許^す時^に吐^きん^んを^せ能^く
其^の力^を是^に用^ひて^は自^ら吐^きん^んを^せ能^く
是^の如^く許^す時^に吐^きん^んを^せ能^く
其^の力^を是^に用^ひて^は自^ら吐^きん^んを^せ能^く
是^の如^く許^す時^に吐^きん^んを^せ能^く
其^の力^を是^に用^ひて^は自^ら吐^きん^んを^せ能^く
是^の如^く許^す時^に吐^きん^んを^せ能^く

七

四

此法あり強く病の治せるは自然ありて
 薬は其力に足らざるは所を助るその如き
 西洋の人の自然の體中の一大良醫にして
 薬は其輔佐ありて是後りかあること誠
 辨くその少の事のみも薬を服するは其益
 ありて其害多し一試し持て其意ある
 處をこそ知り假初も腹中に入る物
 の再し取去りかすまの句端なき瑣細心
 物ありて其意ありて一鼠蟻蛇の類は人を
 損傷するといふを微細なる歯を以て人乃
 肉を咬むと整なり志すありて其毒と氣血は
 從しと流るる一微毒一^{ひんぎ}大毒とあり動
 次を命令を失つては生るる事亦然り解き
 一丸一刀まきとて其効力ある事亦然り
 能く處るるは其法あり其法は
 合つて其意ありは害あるがゆゑあり

頼^レ壯^一實^一不可^レ過^ス房^ヲ

人の精水ハ生涯其量乃定まりはものな

分利しそをもを變化し外は九竅をま

きそく其物を泄せしより出るもの痰唾

涕の類下より出る物小便其糟粕は大便秘

して棄去り其精乃氣とある物を鼻以下

天の大氣を吸入し呼吸して物を吐く鼻口

より泄れ其他は汗腠理より不務れぬ

泄せしむる 腠理ハ即汗孔あり是より泄せしむるもの如西洋より
ナイトワツセミングと名づく常ハ容易にたえぬ故に其物あり

冬時陰氣行きて鼻口を塞ぎ易き頃日ぬ映るる時ハ熱氣の
如く影さるるものは皮層に潤あるるは物を吐くは

程よく泄せしむる人の病あるるは是也 是血液

清潔にして能呼吸し氣も閉塞せしむるは

ありかゝある人よても動作を悪く安逸を好

む時そ血液の清潔なるものを次々平不潔とあり

氣をも見ふつと閉塞し 動作を少くは血液流るる
くあるは假如ハ久坐久卧

は其床に著し下の方より體乃重きに壓せしむる氣血の流るる

患事には速し是氣の閉と不閉との分を長病人の

破爛を生じざる其甚しして血液乃腐敗せしむる **百病を生**

ざる因とあり 雨水ハ茶を煮るに良あるるをれちり是を貯ふる法
ハ雨の下る時壺よりけし是を貯へ口を封し坐右より置

昼夜そ儀を往來する時其壺を振動せしむる中の水数日を爲して清

潔なるものと新し下はもの如く若振動せしむる腐敗して濁を生じ終り

垢を生じし出も生じ人の動作を悪く

血液不潔せしむるものと此理あり

此病急多如此如く鼻を流す味ハ辛
 烈多して膽石乃性多むく一なる筋肉を腐蝕し
 堅硬なる骨を打腐すと是ふよりく鼻柱を
 落頭骨を碎く梅毒はこれら治他の病もある
 然あるれ程かく恐怖もなき悪液を貯へて
 も多々年生命を保つものも幸に其液ハ毒
 聚り凝りゆる急あり若急液周身に蓄り
 又く生るる毒なる要所破傷し傷る時ハ急
 死し候そのありを急液のつよ聚り瘡となる

その毒多し腫る處一草木の幹づり中朽れ
 枝葉に枯せる所もさう如く是其根ハ腐れ
 ざればあり又氣の變はるを閉塞して病を
 有候といふハ病皮乃裏中あるつとかの毒ハ容
 易に流る一づり一假令ハおしく心下ハ瘡と
 腫乃微満し候類ハ多しハ毒の閉塞はる
 かな故に愛氣をききばそれ故に瘡を瘡づり候との
 流る毒ハ流る毒を去りて瘡を是れ也
 あり又その他留飲も似らぬ病もあはれ是も

傷中に氣の聚る所ありて其聚る所胞脹ちやう他の

所を推し迫む故に拍急ひやくなるものなり

是よりうつろひ傷の位置或は片位ひやく或は上下し

〜其本位ほんゐたゞ

勝ハ擲ガ多ク其の氣を卷くるる處に噴能力のこ
あゞ上下左右種々に廻曲折したるものなり

大勢魚鳥の

故に能く拍後はくご其本位ほんゐ復かへりその

氣乃聚るもの故に雷鳴かみなり或は氷の如く

鳴りて治す又鍼して治す法を同おな其鍼眼ちやくより微

に氣もれ〜絞腸しやくぢやうの本位ほんゐ復かへり故あり總すべ氣

乃閉塞へいさく甚し〜拍はく生命せいめいを損こるもの急凍きゆうとうの

害をぬき〜
此氣ありやりの氣を帯くる風乃
如〜其力弱き時の害あり〜それ

暴烈あるにありて強力きやうりきて家を倒し〜恒とこを倒し〜其力弱き子の拍はく紙鏢しせん炮ぱうとさふ拍はくあり是の拍はくの後先ごせんの節せつを去り其管かんあり〜肉にくの

中よりお〜先まへの〜嘴くちばしの紙しを焼やく作り細こき棒ぼうを推お送り又別わかは一丸いちわんを

作つくりて同おな下したやうに拍はくやうに其間そのまは白しろく〜空くうを氣き冷ひやすに打うち迫おめられ物ものは

強つよ〜あり強つよより先まへの丸まるをなげ激げき發はつ其その管かんは二三二三分の

鏢せん炮ぱうの如ごとく〜氣きの閉塞へいさく〜勢いきほい増まえ大丸おほまるは〜

乃類なうるいひ婦人ふじん女子こし富とみあり〜者ものの室むろ居ゐる

も由よし衣え履はきの備ひへ如何いかも傷やむるものあり

男子なんしの野の外がを〜の裡うちに拍はく急きやくなるものあり

は貴人きじんの〜も夫おつとより初はつめは〜傷やむるものあり

傷やむるものあり〜傷やむるものあり

傷やむるものあり〜傷やむるものあり

時を以て譲り四年遷居して居たり

は長子の直子遷居
人よりあつたを家

を獲て子孫字を以てしりしは子孫のよき親しき事なり
ゆゑ其の事を知るに其の字を以てしりしは男子出生は

悦友たまた 隠居

徳壽翁
といふ

と云ふ人ありきしは其の事ありしにあり

不幸に也其の事ありしにありしにあり

子出せし家禄も甚し減せし其の事あり

後子孫の事によりて遷居ししは其の事あり

ふまゝにありし事ありしにありしにあり

譲りし事ありしにありしにありしにあり

死せり本橋園右衛門といふ事ありしにあり

あゝと云ふ事ありしにありしにありしにあり

子と云ふ事ありしにありしにありしにあり

滞りし事ありしにありしにありしにあり

られ九十九歳にありしにありしにありしにあり

た侍人とも皆長命ありしにありしにありしにあり

船を出し其の事ありしにありしにありしにあり

動作を嫌ふ事ありしにありしにありしにあり

辨へし事ありしにありしにありしにありしにあり

少くも其の事ありしにありしにありしにあり

大又

心苦一箇之持平刻一冢子終一之
其贈之也思人々々其子元々之むる
未傳之可程

小結僊堂之玉羽著



神田族譜町壹百拾番地
三河屋幸三郎

